序章

荒々しく弾ける波の音……。
麻酔を打たれた時のように距離感が鈍い…。
耳にぶつかる波音は幼児のまどろみのように淡くたよりないが、次第にゆるやかにではあるが波やしぶきの音はより鮮やかに、より立体的に意識へと迫ってくる。
と同時に強烈なストレスを食道に感じた。
意識の下では喉へ流れ込む猛々しい水流と突っぱねたい緊迫がせめぎあっている……。
ザブリザブリと音を増し耳に迫ってくる波音。
より荒々しくより鮮やかに……。
突っぱねたい緊迫が募るのに従い、深い深い闇の中に眠る端々の感覚が追い立てられるように一つの鮮明な意識へと収束していった。

少年はバチリと目を開けた。
世界を認識する間もなく喉の奥の潮辛さを猛烈なしぶきとして吐き出し、咳き込んだ。
息つく間もなくゴブゴブと海水が喉奥へ攻め込んでくる。
腕をもがき、海面を叩き、逃れ得る景色を求めると、視界に乱れる海水の隙間にふと広がった眩しい空間は冴え渡る白郡の空だった。
少年は呼吸のリズムを見つけられないストレスと苦しさとパニックで、再び意識が裏返っていった。

ネイビーブルーに果てしない海の真っ只中に少年はポツンと無抵抗となった。

仰向けに沈んでゆく少年の見上げる海面は白くゆらめき、眩しい。
ゆるやかに意識は遠のいてゆく。
どこからか流れてきた人影が皆既日食のように海面の光をさえぎってゆく。
光にかたどられたその人は手足をダランと弛緩させ、髪の毛はもやもやとゆらめいていた。
少年は薄れゆく意識の中でぼんやりとその対象は自分の影であるかのように思えた。
影は影であるのに海流に揺らぐ少年の腕に動きを合わせようとはしない。
何故だろう……。
沈み行く少年のぼんやりとした意識は何気なく自らの四肢へとめぐる。
右腕を動かしてみた。
動いた……。
少年は咄嗟に目を見開き、大きく両腕をかくと足を交互になびかせ、海面へと上昇して

ゆく。その人影の横をすり抜け、海面を突き破った。
ッパハオウッッ：：。
ありったけの酸素を吸い込み、髪から流れ滴る海水に息をふさがれ急激なストレスを感じ、前髪をかき上げると、犬のように首を振りながらバックリと酸素を吸った。
瞳の表面をゆるゆると流れる海水の向こうに浜が見える。
約３００メートル。
焦点の合わない浜を瞳に映し、擬人化した植物のようにバホウッッッスーッと呼吸を繰り返していると、少年の肩の後ろに男の頭がぶつかった。
波間に漂うその男はうつ伏せの状態で紫黒色のウェットスーツを身に付けており、そのスーツには特殊な仕掛けが施されているらしく、浮力が備わっていた。
：：：：動かない。死んでいるのかもしれない。
少年は本能に仕組まれているかのように当たり前に男を裏返し、脇に抱え、平泳ぎの時のように足を掻き、浜を目指した。

当初の印象とは違い波は穏やかだったが、まだ細い少年にとってその重たい浮き輪はかなりの難物であった。
幾度も体勢を変え、泳ぎ方を変えたが、なかなか体勢も定まらず、上下に揺れる重たい海面はもどかしいばかりで浜との距離は縮まらない。
ようやく海中から続く浜を踏んだ時には飲んだ潮に腹は膨れ、２、３歩も歩かぬうちに嘔吐のようなゲップを咳き込み、食道をせりあがる大量の海水を海へ吐きもどした。
そして、消耗激しくふらつきながらも男を浜へひきずり、倒れこむように膝を落とし、男の胸に耳を当てた。
耳を澄まし、目を閉じる。
・・・・・・・・・・・・・。
ケイレンしていた少年の胃は静寂を呼び水に激しく蠕動し、しぶきを弾くよう咳き込み、男の体から離れ、浜に両手を付き、咳き込み・・・・・・・・・・・涙目に砂を見つめ、集中しながら咳を待つ・・・・・・・・・唾を溜め潮を薄め、ブッと吐き出した。
：：もう一度唾を吐く。
そして一つ大きく息を吐いた。
まだ舌の裏や喉の奥には血のような潮が強く香る。
少年は、男をはすに見遣り、胸元に耳を近づけようとしたが、やめた。
そして男の隣に仰向けとなった。
白郡の空には陰影の深い雲が地球のゆるやかな曲線に沿ってまあるく流れてゆく。
背中に感じる軽やかな砂は干したばかりの布団のような熱をもっていた。
穏やかに打ち寄せる波の音は疲れ果てた少年の体を砂の一部として調和させてゆく。
意識が頭骨を浸透し砂に沈んでゆくような錯覚を覚えながら、太陽をさえぎり過ぎてゆ

く雲を４つ数えた。
太陽はまだ眩しく輝いているのに、雲の数とともに輝きに見合う温度からは遠ざかってゆく。
太陽の仄かな熱は力なく少年の白い肌に届くだけとなり、微風は産毛を揺らしてはそしらぬ顔で体温を盗み消えてゆく。
少年はふと末端の冷たさを疎ましく思い、横向きに胎児のような姿勢となった。指先を握り、末端をこする。
太陽は次第に色を赤く変え、夜に押しやられてゆく。
少年は膝を抱え、ケイレンのように顎からつま先までを強張らせ震えているため、顎への過度な緊張と疲労は、耳への負担となり、顎から耳にかけての痛みが止まらず、頭痛へと関連してゆく。
正面に沈みゆく太陽は、少年の心臓と直結している。赤い太陽の一片が地平線を去るなり、少年の赤い臓器の伸縮も途絶えることだろう。
少年はまだ正しく我を取り戻せていない。
夜の粒子が次々と定位置に配置されてゆく。
押し開かれ震える瞳があてもなく凝視した薄闇の向こう、地平線に消え入りそうな紅非の空を引き連れた太陽の遥か手前、海面が不自然にさざめいた。
丁度少年が意識を取り戻したあたり。
少年はガクガクと震えながら、ただ気付いた。
さざめきはみるみると持ち上がり、海面を突き破ったぞんざいなシルエットは、垂直に付きあがるなり、ここにまで届くような水しぶきをあげ、勢いよく海中へと消えていった。言い知れぬ戦慄を残し：。
少年の震えは止まっていた。はちきれんばかりに瞳孔を開いたまま。
魚ではない：：：：。
それに喰われたかのように太陽は消失していた。
少年はハッとして上体を起こすなり隣の男のウェットスーツに手をかけた。
少年は意識が別へ飛んだことにより、ただ震えるだけだった自己と外は切り離され、視野が広がったのである。
震える手先に感覚はないため、よくは分からないが、ウェットスーツは乾いていると思う。
チャックを探そうとさぐるが、大袈裟なほど手が震える。震える両手を口にあて、息を吐くが儚くじれったい。制御出来ない指先を伸ばし、強引に口内へ押し込む。噛むように舐めては交互にしゃぶり、少しは感覚を戻した手を水でも払うように振り、グウにしては幾度も開き、男のウェットスーツを脱がせた。
男とはサイズが異なるのに少年の体にピッタリとフィットした。
そして迅速に暖かくなってゆく。自分の体温だけではこうはいかない。

やはりこのスーツは特殊な施しがされている。
凝り固まっていた肩がゆっくりと弛緩してゆく。
冬場にカフェ・ラテを一口飲み、瞳を閉じた時のような温もりを覚え、ホッとひと息ついた。
僕……僕は……ここは……。
何も思い出せない。乗っていた船が沈没でもしたのだろうか。
夜の海は穏やかなさざ波に月を浮かべ、ユラユラと輝いていた。
ぼんやりとゆらめく月に視線をゆだねていると、唐突にあの生物のぞんざいなシルエットの残像が胸にグンと迫ってきた。
呼吸が浅くなる。さっきまであの場所にいたのだから。
この静かな海は兇悪な二面性を秘めている。
僕の視界の大半を占める海が途端に制限され、僕の居場所はこの冷たい浜だけとなった。
どこか窮屈で息苦しい。
月夜を浮かべた海のどこかしらから得体の知れない嬌声が一つ上がり、それに呼応する同じ声がいくつか上がった。
静寂があり、すぐ近く左のほうからヂャポと連続した音が続く。
僕は無防備な背中がむしょうに危うく思え、砂浜に胴体だけの穴を手早く掘り、体を埋めながら砂の中に押し込むよう足を伸ばした。しかし、砂は浅く落ち着かない。僕は人に抱き締められる感じのぎっしりとした砂の重みを欲していた。もう一度手早く穴を掘り直し、首だけを出し、ようやく重い砂に納まった。
やがて、首から下のたかぶりは大地に鎮められてゆく。
僕は……僕は……。
夜は宇宙の色をしている。
正面の広大な宇宙には、おぞましいほど膨大な星々が瞬いていた。
僕は無限と無の畏怖をそこに感じた。
様々な音は海からだけではなく、頭の近くにまで迫っている裸子植物の森からも、時折ホルンのような音がどっしりとした低音から広がるように響き渡ったり、ツイーンッチッチといったような奇怪な鳥の声やせわしない虫の声、地響きなど多種多様な音が絶え間なく続いている。
森の息吹が首をもたげ、僕を探しているような奇妙な錯覚にとらわれ、僕は首をすくめた。
今のところ人の気配を感じていないが、やはりここは無人島なのだろうか。いつのことだったかロビンソン・クルーソーを読んだことがあった。表紙の彼はモサモサと髭を生やし、木の枝でこしらえた釣竿を肩にかけていた。僕も彼のようにモサモサと髭を生やすまで通りかかる船を待つ生活を続けなくてはならないのだろうか。
まっぴらだ。確かまだ下の毛すら生えていない。

僕は・・・どうしてこうなったんだっけ・・・・。
僕は・・・・だれ・・・だっけ・・・？
ロビンソン・クルーソーを読んでいる自分に焦点を絞ってみようとしたが、目を瞑り考えれば考えるほど頭の中は澄んでゆく。確かに思えた本の表紙まで強く光をあててゆくように白んでいった。
僕は諦め、目の端に映る人を終えた裸の男をじろじろと観察した。こちらに背中を向け横向きにだらしなく足を重ねている。
月明かりに照らされ青白く生々しい。
今考えると彼の姿はずっと引っ掛かっていた。何故だかは分からないが僕の記憶とつながっているような気がする。何というか・・・彼を知っている。そんな気はしていた。いや、知り合いというよりももっと親密な・・・。
僕は再度目を瞑り僕の記憶との交信を試みたが、宇宙から星を消したような闇を見つめただけだった。
だが、彼を思った時の確信めいた感覚は僕の記憶よりも確かな記憶に思えた。
向こうを向いている彼の顔をもう一度確認したかったが、起き上がるのがおっくうなので、彼の顔のモンタージュをまぶたの裏に作ることにした。
齢は３０代前半。彼の濡れた髪は確か黒の気配を含んだヘーゼルブラウンで顔立ちはアングロサクソン系、ラテンのクォーターといったところだろうか。眉の辺りには厳しさと悲しさの混在したような印象があった。
その出来上がったモンタージュを眺めていると搾り出すような懐かしさが込み上げてきた。肉親なのだろうか。例えば、父親？そう思って彼の背中を眺めたがどうもしっくりとこない。誰かであってだれでもないような気もする。
誰だろう・・・・。
時に騒々しいほどの音の底層で穏やかに打ち寄せる波の音が、次第に僕の眉間を解いてゆく。とても疲れていた。
僕は薄ぼんやりとまぶたを開き、宇宙に満天に散りばめられた星々を瞳に映した。
線香花火のように儚く散る散る流星に僕の意識はかどわかされてゆく。
静かに閉じたまぶたを開けると、そこは眠りの世界だった。

深いまどろみの中で胸にかかる重みが消えてゆく・・・とともに呼吸がラクになっていった。そして今度は別の重みが胸に加わり、僕の顎にフサフサと毛のようなものが触れ、気配はいったん離れた。
僕を見下ろしている。
トクトクと早まる心音に僕の瞑ったままの眼はミルミル冴えてゆく。
そしてその気配はふっと沈み込み大きな手の平が僕の鼻と口をふさいだ。

僕は咄嗟に目を見開き、思いっきり首を左右に振り、腹ばいへと身をひるがえすと、ほふく前進のようにして抜け出し、腰が抜けた格好で相手を見上げると、ノシノシと僕の足元に立ち止まったその影が、ヌーッとそびえていた。

人であることには違いなさそうだが、とにかく大きいと思った。人の腹からは生まれない種、ビッグフットやイエティの類いとみまがう程人間離れしている。

男は濁点を利かせたよく響く声で笑い、

「心音がよく聞こえなかったものでな」

と使い古した喉に笑みを弾ませ言うと、耳をほじって見せた。

暗くて見えにくいがやはりデカイ。齢で言うならば老人の域に達しているのかもしれないが、ウェットスーツに浮かび上がる骨格ははなはだがっしりしており、ただならぬ圧力を放っている。

老人は僕をほったらかして、横たわる男の傍らに膝を付くと、男の頬を掴み口を押し開いて中を確認し始めた。

荒々しい顔立ちのようだが、海から上がって間もないのかシルバーのゴーグルを装着したままなので、目の様子は窺えない。

そういえば、僕は何気なく老人の言葉を理解したが、老人は英語を話していた。

老人にどこか東洋の匂いを感じたため、しっくりとこなかったのだとシコリをゆっくりと溶かしてゆく。

僕は手をはたき、砂を払い、じっと老人の様を眺めた。

僕には何が何やらさっぱり状況が掴めない。

老人は男の亡骸を簡単に担ぎ上げると、

「来なさい」

と僕を見下ろし、縁のよく分からない暗い色の船の方へノシノシと大股で歩いてゆく。

老人はグズグズしている僕を振り返り、

「怖がることはない。というよりも恐れるべきはわしなどではない。何かについばまれることを快感とするなら無理にとは言わんが」

とゴーグルをキラリと光らせ僕の背後にある険しい森を見やるとジャブジャブと小波を進んでゆく。

この森にはいったい何がいるというのだ。二人を知ってしまうと一人が怖くて不安でたまらない。

僕はあの絶対的な背中を孵ったばかりのヒナの目で見つめた。あの背中を失ってはいけない。そう思うと走らずにはいられなかった。

老人は亡骸を肩に担いだまま梯子を上り、亡骸を船のデッキへ下ろしながら、

「あんたの身内かな？」

と言って、僕を見下ろした。

僕はバシャバシャと無我夢中のクロールを終え、梯子に手をかけたばかりで、肩を上下

させ呼吸するのに精一杯で老人を見上げると首だけ振った。
「そうか、わしより英語の上手そうな顔をしていたからな」
老人は声を荒げるように笑い、体重で船を揺らし船べりをまたいだ。
僕が英語を話せないと思ったのだろう。
だが、訂正する気力は残っていなかった。
自力でデッキへ上がったような気はするが、それからのことは覚えていない。

波の揺れに合わせて開閉する扉のように、ふとした弾みで目蓋が開いた。波に揺れるベッドから見えた窓枠には、朝焼けか夕焼けが美しかった。自分の体温にくるまれて心地よい。まぶたを閉じ、再び深い眠りへ……。

ロイヤルレッド

気付くと、真っ白いシーツを横向きにぼんやりと眺めていた。
新しいシーツの匂いと古い家具の匂いがする。
ベッドで横になっていた僕は、シーツから正面に瞳を移すと、壁沿いに重厚にそびえる本棚をぼんやりと確認するなり、上体を起こし、部屋を見回した。
くぐもった分厚いカーテンの隙間からみなぎる一条の白光が、混乱した精子達のようなほこりを明らかにしている。深みのあるくたびれ方が雰囲気を醸し出す素敵な部屋だが、鼻がムズムズする。
どのくらい寝ていたのだろう。きっと睡魔が何かの分量を間違えたのだ。
それにしても、僕：は……？
何となく波の揺れが体に残っている。今更ながら、ここは船内ではない。
目を瞑るとあの海の一部始終が遠い過去のように脳裏に甦った。しかし、それ以前については海に洗われてしまったのか、まったくの空白だった。
僕はしどろもどろにベッドを抜け出すと、並べてあったスリッパを履き、重たいカーテンを勢いよくチャッと開けた。
光に負けじと目ぢからを込めると、窓枠にようやく納まるほどの距離に見覚えのある時計台が目に飛び込んできた。
「ビッグベン……」
僕は思わず呟いた。芋づる式に記憶の予感：ッッ……ッッ……ッッ……白くパンクした。

そう簡単にはいかないようだ。
ここは古い屋敷の2階で、窓の外にはひと続きのバルコニーがあり、木のよく茂る庭が見える。そして、幅の広い河を挟んで、時たま赤の映えるくすんだ石造りの街並みが広がっていた。
ロンドン・・・?・・・・・ではない。
ビッグベンから数百メートルのところにあてつけのようにエッフェル塔が建っていた。昔の映画で観るようなロンドンの街並みのようにも見えるが・・・昔?・・・だからと言って今のロンドンはどんな様子だっただろう。とにかく、この街にはロンドンでもパリでもない異国の風が吹いている。
ここは・何だ・・・。
僕は両手を髪に差し込み、手の平で側頭部を押さえながら、頭蓋骨が軋むほど腕に力を込める・・・・。
諦め、ふうと息をついた。
考えてみれば、僕の頼りない記憶の方がよっぽどインチキくさい。きっとこの風景こそが真摯なしろものなのだろう。
記憶が頼りないというのは無重力の感覚に似ている。
僕は床をパタパタと踏み鳴らした。
窓を開け、風を入れた。ひんやりとした風には河のすがすがしさが溶け込んでおり、空っぽのくせにヒートアップした頭を清涼感で満たしてくれる。色あせて見えていた花や鳥や大地がみるみる瑞々しく色を取り戻していった。

僕はレトロでダンディーな扉を開け、ロイヤルレッドのカーペットの敷かれた廊下に出ると、中央階段へ向かっておそるおそる歩き始めた。階下からは人の声や足音が建て物に吸収され小さくなって昇ってくるが、2階は恐ろしくひっそりとしている。
歴史を感じる静寂に、軋む床を音を忍ばせ進んでゆくと、何気なく目を向けたドアの隙間に、思わず立ち止まった。
ほこりを被ったファンタジーがそこにあったのだ。
比喩ではなく。どういうことだろう。記憶が失せたからファンタジーに見えるだけで、本当はとても常識的で、物理的でピエロの素顔的なものかもしれない。
僕は人の有無を注意しながら、おそるおそるドアの隙間に体を滑り込ませた。グーニーズの屋根裏部屋を思い出す。これらは作り物なのだろうか。そうは見えない。まず目に飛び込んできたのはステンドグラスの光を背に受けたコンドルの白骨標本で眼窩の黒々とした闇だけでも不気味なのに額の中央からはいびつに鋭い角が生えている。
僕は乾いた舌で唾液を探りながら、中へと足を運んでゆく。右の棚にはホルマリン漬けの円筒形のガラスの入れ物が、段に別れいくつも並んでいる。
一番上の段の右から3つ目のは比較的かたちがはっきりとしていて、巨大な毒虫だろう

か、１ｍ以上ある。わき腹をかじられた跡があった。ふと言葉が浮かんだ。アノマロカリス。アノマロカリスだ。カンブリア紀に海を支配していた種である。１４対のヒレをウェーブさせ泳ぐ甲殻類である。

その棚のふもとにはフジツボの付いたヴァイキングの兜が５つ雑に転がっている。更にその隣には蓋の閉まらず中身の噴きこぼれたような宝箱があった。

サファイアにアメジストにルビーにエメラルドにダイヤにトパーズにピンクトルマリンに珊瑚に琥珀に金貨や短剣やティアラ、カメオや宝石の散りばめられた華やかな金のストマッカー。きりがない。僕はありったけの宝石を口の中に押し込み、真珠のネックレスを歯にコポコポと音をさせながら出し、抵抗する口に指を入れ宝石を掻き出し、延髄の辺りを自分で叩き、わざと咳き込み宝石を出した。やってみたかったのだ。

僕はブカブカの兜をかぶり、重さにふらつきながら立ち上がると、棚に立てかけてある額を手にした。表面はほこりが湿気で固まっており、よく分からない。宝の地図かもしれないと胸をときめかせ、三本指で力を込めジグザグにこすった。

期待は外れた。

ほこりの膜のこびりつきは永久凍土のように頑固で見えづらいが、何の変哲もない灰色の猫の写真だ。

額を同じところにたてかけ、次に向かったのは、隣の棚の前の椅子に腰掛けたアステカの戦士である。、ジャガーの毛皮を身につけ、ジャガーの口の中にうなだれた顔が隠れている。鮮やかな鳥の羽根を挿した丸い盾と槍が彼の肩にたてかけてある。彼の隣にはワシの戦士が腰掛けていた。

獣臭い。毛並みはただの死骸のようにガビガビに毛羽立っており、汚れにまみれている。

僕はない唾液を無理矢理呑み込み、震える指先でジャガーの頭をつまみ持ち上げた。

ほ、頬骨をひどく損傷した骸骨である…。眼窩の奥の闇が深い悲しみに沈んでいるように見えた。完全なる静寂を欲しているのかもしれない。

「ソーリー、…ムソーリー……」

小さく呟き、ジャガーの頭を下ろそうとしたその時、

ピシム！

音がした。反射的にその方を見るとさっきたてかけた額が後頭部をうちつけ、ほこりが舞っている。戦士の冷たい手に心臓を触れられたような思いがした。

僕は額を手にした。やってしまった。ガラスのひび割れは思ったほど難解ではなかったが、どうしようもない。裏返してたてかけておこうか。こんなにほこりを被っているのだ。大切なはずはない。しかし今まで僕の積み重ねてきた記憶が誠実な人間だったとしたらかわいそうだなと思い、意味の不明な失笑をこぼした。どうしようかと額を見ると、ふとほこりの向こうが身近になったことに気付いた。いびつな三角形をめくってみると、ネコは灰色ではなくシルバーであった。生物的なシルバーではなく光の反射を得意とするタイプのシルバーである。どんな環境にあったらこんな色になるのだろう。

額のことはあとで老人に謝ろうと思った。
僕が額を置き、扉の方へ向き直ると、入り口にちいちゃなサルが立っていた。
僕とサルはしばらくまばたきで会話をしていた。
人でない霊長目ということで咄嗟にサルと判断したが、完全に二足歩行で、頭部以外の体毛はほとんどない。骨格は人の子よりひとまわり小さく、ミニゴリラのように眉が突出している。
眠そうだが、愛くるしい黒目がちのまん丸い目で僕を見ている。その子は起きぬけなのか寝ぐせがあっちを向いていて、ベビーブルーのパジャマの上着がズボンからはみ出ていた。そしてサルのぬいぐるみを左手にぶら下げている。
「ハ、ハイ」
僕が手を上げると、その子もぬいぐるみを持った手を少し上げて、小さなおならをして、くるりと廊下へ向き直り、歩き出した。
僕も引きずられるサルのぬいぐるみを目で追いながら後をついていった。
この子は、小さい。やはり人との骨格が違うのだ。
階段にまで引き続き靴底になめされ古びたロイヤルレッドのカーペットが敷かれている。
あの部屋のコレクションといい、あの老人は相当の金持ちなのかもしれない。
サルのぬいぐるみは階段をコテンコテンと無表情に頭をうちつけ、あの子の後をゆく。
踊り場の突き当たりの光は穏やかだったが、階段を下りて正面にある出入り口に埋め込まれたステンドグラスは、絵の縁取りが消えるくらいの強い光で床を彩っていた。
1階を行き交う人々は、リンクと呼ばれるその小さな子に欠かさず声をかけ、頭をぐしゃぐしゃ撫でたり、キスをしたあと、必ず僕を見ておかしそうに微笑み過ぎてゆく。
僕はハッとし、頭を探った。そうだ、どうも頭が重いと思っていたら、ヴァイキングの兜をかぶったままである。
はしゃぎすぎたと顔が火照った。じんじんとした耳を隠すため、兜を深くかぶり、
「これ、戻してこないと」
リンクに声を掛けてみたが、相変わらずプカプカと眠そうにサルのヌイグルミを引きずり行ってしまう。
「ちょうど良かった。動かないでね」
すれ違いざまに白衣の女性が僕の兜の角で背中を掻き、ありがとうと、兜を撫でて行った。
「ね、ちょっと。コレ……言葉分からないっか……」
僕はもう一度リンクに訴えたが、無駄だと悟った。
往来が激しく恥ずかしい。
少し気になるのは、すれ違うどの人も表面的には穏やかだが、どこか内に荒いものを秘めている気がする。手や顔など肌の露出した部分に傷のある人がやけに多いため、そう思ったのかもしれない。この屋敷で何か事故でもあったのだろうか。